

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730337

研究課題名(和文) 産業集積の再構築過程に関する概念的モデルの開発と経験的検証

研究課題名(英文) Understanding the transformation process of industrial districts

研究代表者

相原 基大 (AIHARA, Motohiro)

北海道大学・経済学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：40336144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、産業集積の再構築過程を理解する概念枠を構築し、複数の産業集積地を対象にした比較事例分析によって同枠を経験的に検証することである。主要な成果は3つである。(1)理論的基盤の慎重な検討と経験的データにもとづく記述的推論とを通して、それぞれの事業者が展開するミクロな行為が産業集積のマクロ的な構造特性を生み出し、新たな競争環境への適応を実現していく過程を理解する概念枠を析出した。(2)産業集積の再構築過程を多面的に把握する包括的なデータセットを構築した。(3)産業集積の行為主体が展開してきたディスコースを対象に、業界や産業集積を取り巻く歴史的な文脈を数量的に理解する手法を提示した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to give a mechanism-based explanation about the historical process in which industrial districts have been transformed. Drawing on the theoretical insights of category studies, the conceptual framework is developed for analyzing the trajectory of industrial and social contexts in industrial districts, such as categorization, 'standardized' business practices, rational strategic recipes, and codes of conducts in the business settings. The framework has been refined through comparative case studies of five industrial districts. The study also provides the systematic and qualitative analysis of texts to understand the dynamics of industrial and social contexts from historical and qualitative documents.

研究分野：社会科学

キーワード：産業集積 再構築過程 制度的文脈

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景にある基本的な問題意識は、「産業集積の再構築はいかなるプロセスをたどるか」という点にある。研究開始の時点で産業集積を対象とする研究は、産業集積地を一つの分析単位に位置づけ、技術イノベーションの創出能力や経済合理性に結びつけて総括的 (generic) な構造特性の抽出を試みる研究、および集積を構成する行為主体を基本的な分析単位に位置づけ、当該地域に事業所が数多く集積する過程について起業行為から説明する研究の2系統が存在した。

以上の2つのアプローチにおいて蓄積されていた知見は、技術イノベーションに適した構造要素や集積の形成過程に限定されており、既成の産業集積地が質的に変容し、新たな競争環境に適応していくダイナミックな側面を捉えきれないとの限界を有する状況であった。また、それぞれの業界や産業集積地で流れてきた特有の文脈 (コンテキスト、脈絡) による影響を強くコントロールしたモデル化を指向しているために、現象理解の精度が犠牲になっていた状況であった。

以上の現状認識にもとづき、本研究では、メカニズム・アプローチの立場から、それぞれの事業者が展開するミクロ的な行為が、産業集積地の新たなマクロな構造を生み出し、新たな競争環境への適応を実現していく動的な過程をクリアに描き出したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、産業集積が再構築していく動的な過程を理解する概念枠を構築し、複数の産業集積地を対象にした比較事例分析によって同モデルを経験的に検証することである。具体的には、産業集積のマクロな構造の変動をもたらす社会的な機序 (メカニズム) を理解する上で不可欠である、(1)いかなる制度的な文脈 (商慣行、情報経路など) のなかで特定の行為主体 (起業家など) による時々のディスコースや営為がうまれたのか、(2)ディスコースや具体的な営為に対して集積内外でいかなる反応が観察されたのか、(3)当地で形作られてきた制度的な文脈はいかなるミクロ的な過程を経て変容していった

のか、の3点の解明を試みた。

3. 研究の方法

本研究では、厳密な先行研究のサーベイにもとづく理論研究、史料に残された業界の行為主体のディスコースを対象にした計量的研究、史料やフィールド調査で得た資料にもとづく定性的研究の3つの研究手法を併用した。以下、研究期間に沿って具体的な方法を記述する。

初年度は次の3つの研究活動を展開した。

第1に、経験的調査に先立ち、主に経営学、地域経済学、経済地理学の3分野を中心に国内外の産業集積研究を渉猟し、既存の知見と限界を整理した。産業集積研究における既存研究の知見に概念枠の基盤を求めたが、同レビューを通して、本研究の有力な参照点となる信頼できる既存の知見が断片的であることが判明した。具体的には、産業集積の構造を機能的な側面から説明する支配的な視角では、長期にわたり産業集積がトレースしてきた内的な振る舞いを精確に理解するのに適切な概念的な道具立てが未整備であった。

本研究の目的を達成する (産業集積の再構築過程を高い精度で捉える概念枠の構築) には、次の2つの研究指針にそって概念枠の位相を掴むことが不可欠であることを確認するとともに、実行計画の一部を調整した。(1)各産業集積に特有な歴史的な文脈を形作ってきた、集積を構成する行為主体の主観的世界・相互行為・相互作用秩序を軸にした概念枠の探索。(2)分析的帰納を通して、歴史的な豊かさを欠くことなく適切に制御されたモデルを析出する手続きの開発と適用。

第2に、産業集積の現状が形作られるに至る歴史的な事象の連なりと時々の当事者見解を表現するディスコースとに関する分析用のデータセットの構築に着手した。具体的には、4つの産業集積および関連業界に関して、集積ごとに過去35年分から51年分までにわたる膨大な史料を収集し整理した。

第3に、産業集積のマクロな構造特性をより実態に即して確実に理解するために、既存の研究群で提示されている分業構造のエビデンス (工程別事業所数の提示など) に代わ

る、新たなデータセットの利用可能性を検討した。具体的には、主要な調査対象である国内の2つの産業集積地を構成する計501社の詳細な取引先データを収集し、当地で形作られた取引構造の精確な理解につながるデータセットを試行的に整備した。

第2年度は、3つの研究活動を展開した。

第1に、組織ディスコース研究、カテゴリースタディーズ、社会問題の社会学等の分野で開発されてきた理論的な視角や分析手法を援用し、産業集積の再構築過程に関する統合的な理解に寄与する概念枠の組み立てと改良に従事した。産業集積で流れてきた歴史的な文脈、集積を構成する行為主体の主観的世界、集積内の主体間で生起する相互作用秩序を捉える際に有用と思われる諸構成概念を上記の研究分野群に求め、実際の経験的調査に活用可能な分析手法を整理していった。

第2に、昨年度に収集していた、ひとつ産業集積および関連業界に関する過去43年分の史料を整理し、社会科学的な分析に耐えうるデータセットを整備するとともに、産業集積の現状が形作られるに至る歴史的な因果関係のミクロな連りの記述的研究に着手した。長きにわたり産業集積地を取り巻いてきた複数の文脈を抽出し、それぞれの文脈ごとに事象(イベント)の連鎖および事象間の論理的な関連性を記述した。

第3に、産業集積のマクロな動態を特徴づける長期にわたる数的データの挙動に関する記述的な研究を展開した。国内の4つの産業集積に関する各種統計を収集し、海外および国内の他産地の数値と照合して、国際的な産地間競争の態様や産地の分業構造の変動などのマクロな動向を詳細にトレースした。

第3年度は、3つの研究活動を展開した。

第1に、過年度に引き続き、研究の概念枠の改訂を図った。概念枠の改訂に際しては、経験的データにもとづく分析的帰納の手法、および理論的な先行研究に関するオーソドックスな批判的検討の2つの方法を適用した。この分析的帰納の過程では、史料に掲載されている過去の発言・見解、業界が置かれていた状況に関する認識、具体的な活動の内容などについて、当事者に適宜確認をと

りながら、当時に各行為主体が見ていた世界を重ね合わせて概念枠の精緻化に取り組んだ。一方、この理論的研究の批判的検討に関しては、Porac et al. (1989, 2011)をたたき台に、Negro et al.(2010)やVerge and Wry(2014)等の近年発表されたカテゴリースタディーズの最新の知見を参照しつつ、産業集積を対象にした調査研究にふさわしい構成概念の選定と概念枠のチューニングを試みた。

第2に、それぞれの産業集積を取り巻く歴史的な文脈を数的な挙動として把握するデータのハンドリング手法の開発に取り組んだ。具体的には、会議資料や業界紙誌に掲載されている時々の当事者見解を示すテキストデータ(質的データ)を、数的データの挙動に変換し、長期にわたり産地を取り巻いてきた当地特有の文脈を視覚的に把握する手法である。

第3に、比較分析にかなう理論的サンプリングの基準に沿って、最終的に2業種5産地を選定するとともに、各産地の記述的な研究を進めて、基本的なデータセットの構築をすすめた。具体的には、各産業集積の経済的パフォーマンスの挙動にもとづき、複数の分析期間を区分して、各期に関して、国際的な産地間競争の態様、産地の分業構造の変動、関連する行為主体のディスコースや諸活動に関する質的データと、産地出荷額、最終製品の小売市場規模、貿易額などの数的データとの挙動を照合し、産業集積地の再構築過程に関する詳細な記述的研究を遂行した。なお、1産地に関しては、調査過程において研究遂行上非常に重要な希少な史料を発見しデータセットの改訂に努めた。

最終年度は、3つの研究活動を展開した。

第1に、前年度から本格的に取り組んできた、テキストデータから産業集積に特有な文脈を抽出するデータハンドリング手法について、具体的な手続きと適用例に関するペーパーを執筆し公開した。

第2に、追加的な経験的データの収集を重ねながら、各産業集積地に関する記述的な研究を展開した。新たな史料の発見にともない、史料の確かさと解釈の妥当性を確認するために、追加的なヒアリングを実施した。以上

の調査の結果を、産地ごとに研究ノートのかたちで系統的に記述した。

第3に、これまでに組み上げた分析の概念的枠に沿って比較事例分析を進め、産業集積の再構築過程で作動する社会的な機序の抽出を試み、同枠の洗練を図った。具体的には、まず2つの対照的な産地に関する再構築過程の社会機序を検討し、概念枠を洗練させる際の基礎とした。その後、残りの3つの産地の記述的研究の成果を、ひとつずつ比較対照しながら、概念枠の外生変数や概念枠の抽象度をコントロールしていった。

4. 研究成果

本研究のこれまでの主な成果は次の3点である。

第1に、理論的基盤の慎重な検討と経験的データにもとづく記述的推論とを通して、産業集積地に特有な競争の文脈を捉え、産業集積が再構築していく過程のミクロ的側面を把握する新規の概念枠を析出した。具体的には、概念カテゴリ、(競争の)レシピ、コードの3つの鍵概念をもちいて、それぞれの事業者が展開するミクロ的な行為が、産業集積のマクロ的な構造特性を生み出し、新たな競争環境への適応を実現していく過程を理解する概念枠である。

産業集積を対象にした従来の研究では、暗黙的に、産業集積の構造特性というマクロな現象から産業集積の経済的なパフォーマンスというマクロな変数の挙動を説明するアプローチを採用してきた。他方、マクロレベルで観察される現象(産業集積の構造特性や経済的成果の変化)とミクロレベルでの観察される個別具体的な事象(それぞれの事業者たちの展開する活動)とをつなぐ社会的な機序については主要な考察対象とされてこなかった。

本研究では、(1)どのような文脈において時々の活動が展開されたのか、(2)判断を支える当事者の見解は当時に産業集積を取り巻いてきたいかなる文脈のなかに位置づけられるかの把握が、産業集積が再構築していく過程について精度の高い理解につながる点を経験的に見出し、産業集積研究の分野にと

らわれず、研究目的に合う理論的基盤に依拠して経験的妥当性のある概念枠の提示に至った。

第2に、産業集積の再構築過程に関する多面的な把握を可能にする包括的なデータセットを構築した。データセットは大きく次の3つのサブセットから構成される。(1)産業集積の構造特性に関する比較静的な把握を可能にする取引構造データ。(2)史実、業界慣例、当事者見解(現状認識、問題意識等)の記録である、業界紙誌などのテキストデータ。(3)産業集積で内的に作動していた規範や見解の把握を可能にする、当地で実施された内部調査資料。本研究で構築したデータセット自体だけではなく、本研究で取り組んだ分析用データセットの構築手続きは、産業集積研究の今後のひとつの有益な調査研究方法になることが期待される。

第3に、産業集積地の行為主体が展開してきたディスコースを対象に、業界や産業集積を取り巻く歴史的な文脈を数量的に理解する手法を探索し、ひとつの解を提示した。具体的には、計量テキスト分析を援用し、当事者見解の挙動を計数的に表現する手法である。従来、産業集積で流れてきた史的な文脈は、操作性の低い概念であり、測定(計量的把握)が難しいとされてきた。史料のテキストデータを数的データに変換し、数的な挙動から文脈の流利を捉える同手法を適用することにより、次の3つのメリットが期待される。(1)聞き取り調査データや質問紙データに基づく推論のバイアスを適切に制御することが可能になる。(2)産地で生起している具体的な事象や現象に関して、時々の文脈に沿った正確な理解が可能になる。(3)集積内の各行為主体のディスコースを読み取り、業界および産業集積に特有な文脈(文脈、脈絡)が形成・変容する過程をより精緻に理解することが可能になる。なお、同手法を自ら構築したデータセットに適用して、同手法の意義と留意点を整理したペーパーを公開している。

本研究の最大の学術的貢献は、産業集積の再構築過程を高精度に理解する概念枠、産業集積の多面性と歴史的な文脈を捉える包括的なデータセット、文脈を読み取るテ

キストデータの解析手法の3つの技術的な条件を整備し、当地の歴史的な文脈を積極的に組み入れた詳細な記述的な推論を展開する基礎的な知識を生み出した点である。

産業集積を対象にした従来の分析では、先述の通り、産業集積に固有な歴史的な文脈からの影響をできるかぎりコントロールし、文脈から切り離れた理解および一般化・モデル化を指向してきた。一方、本研究では、産業集積が再構築されていく過程で観察される当地特有の文脈の変容を、当地で生起する諸事象を理解する際の軸と位置づけて考察を展開した。産業集積で流れてきた史的な文脈に注目することによって、取引構造に代表される産業集積のマクロ的な変動過程が、当事者たちが動員する現状理解の枠組み、現状に対する「合理的」なレシピ、当地における競争の不文律の変容をとともなう点が浮き彫りになった。

産業集積の再構築というマクロな側面を、時系列に沿った当事者見解と時々具体的な活動の合成というミクロな視点から捉え、析出された本研究の仮説的命題は、産業集積で生起する経営現象の多様な側面をひとつのプロセスのなかで理解する研究の新たな展開に対するひとつの参照点になる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[論文](計2件)

相原基大・秋庭太「産地における競争の文脈をとらえる概念枠 ハウイック研究から得られる知見の吟味」Discussion Paper Series B (Graduate School of Economics and Business Administration, Hokkaido University), No. 2014-119, 2014年3月。

相原基大・秋庭太「業界を取り巻く史的な文脈の視覚的表現」Discussion Paper Series B (Graduate School of Economics and Business Administration, Hokkaido University), No. 2014-128, 2014年10月。

[発表](計0件)

なし

[図書](計0件)

なし

[産業財産権]

出願状況(計0件)

なし

取得状況(計0件)

なし

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

相原 基大 (AIHARA Motohiro)

北海道大学・大学院経済学研究科・准教授

研究者番号：40336144

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし